広報 なは 市民の友

第722号 毎月1回発行
2011年（平成23年）
3月

発行●那覇市　編集●秘書広報課
〒900-8585 那覇市上之屋1丁目2番1号
☎867-0111　●印刷 ㈱池宮商会

市の人口と世帯
※（　）内はうち外国人
2011（平成23）年1月末現在

総人口	318,658(2,153)
男	153,812 (1,099)
女	164,846 (1,054)
世帯数	136,403(1,296)

住民基本台帳人口の内訳(外国人を除く)

本　庁	95,967
真和志	104,523
首　里	57,841
小　禄	58,174

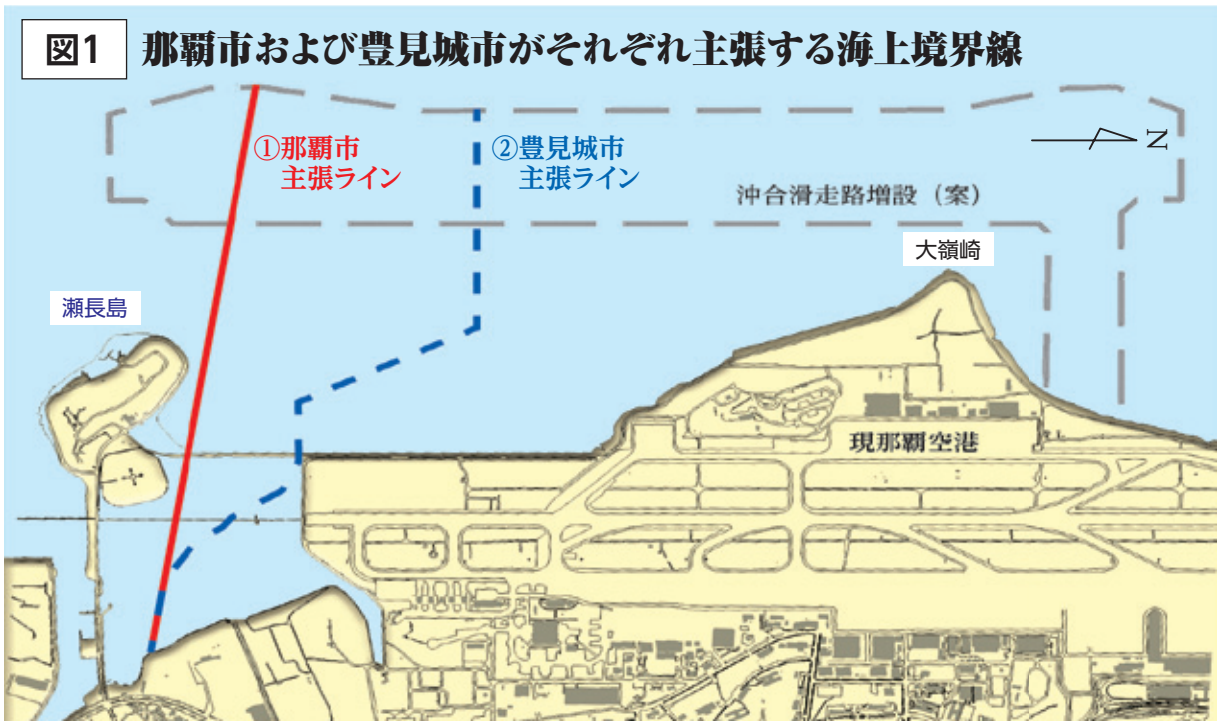
どこから那覇で、どこから豊見城？
～本市と豊見城市の海上境界線問題～

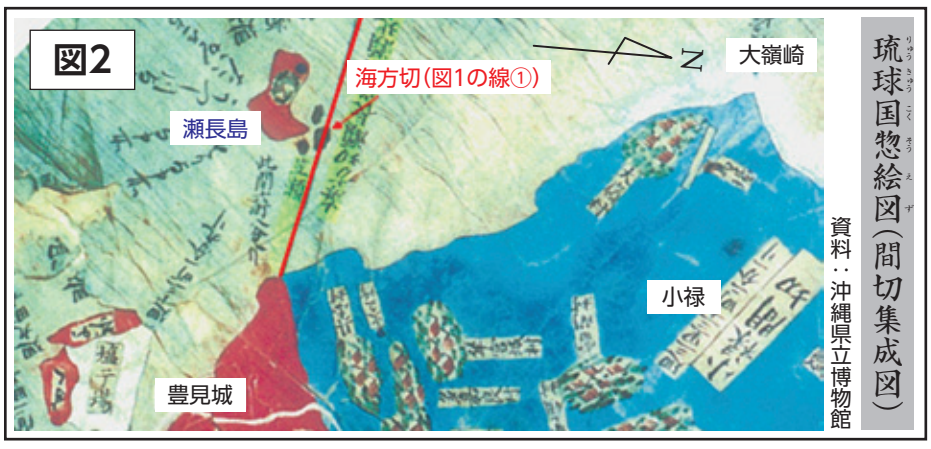
那覇空港近くの瀬長島。市から瀬長島へ行く途中に、市と豊見城市の境があります。陸地の境界線は分かりやすいのですが、その先の海上にも境界があることをご存知ですか？

残念ながら、市と豊見城市の瀬長島側の海上における境界線については、長きにわたり両市で協議を重ねてきましたが、合意には至っていません。

現在、那覇空港の沖合に滑走路を増設することが計画されていることから、海上の境界線確定が急務となっています。

沖合の滑走路が完成すると、燃料譲与税や固定資産税に相当する交付金などが新たに発生し、その額は億単位にのぼると想定しています。これらの交付金などは主に、那覇空港を管理している国から、沖合の滑走路が属する自治体に支払われるため、客観的・合理的な境界線確定が必要です。





琉球国惣絵図（間切集成図）
資料：沖縄県立博物館

海上境界線問題の発端と経緯

この問題は、昭和48年に国土地理院から市と当時の豊見城村に対し、境界線の位置確認依頼があったことに端を発します。

市は、戦前の専用漁業権に基づいた線が境界線であると認識していましたが、豊見城村は、当時の国土地理院の地図に示されている瀬長島北側の海上線が境界線であると主張しました。

しかし豊見城村が根拠とした昭和48年の地図上の線については、市が国土地理院へ照会したところ、「この線は単に瀬長島の帰属を示す界線であった」と回答しています。

昭和54年以降、境界線確定に向けて両市で協議を重ねるなか、平成13年には、歴史的資料である「琉球国惣絵図」が米国で発見されました。この絵図に示される海上境界線「海方切」は、これまで市が主張してきた境界線と一致しており、市の主張を裏付ける重要な根拠になるものと考えています。

「琉球国惣絵図・海方切」とは？

「琉球国惣絵図・海方切」（図2）は、18世紀の琉球王国の絵地図で、当時の行政区画（間切）を示したものです。この内の「南風原、豊見城、真和志、小禄間切」の図には、現在問題になっている瀬長島側の海上における境界線（海方切）が明示されています。

この境界線（海方切）は、専門家により歴史的にも支配・管理・利用の海域における境界線として実効性を持ったものであるとの解釈が示されています。

両市、それぞれの主張

市が、この「琉球国惣絵図・海方切」と同じ海上境界線（図1の線①）を主張する一方、豊見城市は、陸地と陸地の中間点を結んだ陸地間等距離線（図1の線②）が境界線であると主張しています。

このような市町村間の海上境界線確定問題は、他の自治体でも起きており、裁判で争った事例もあります。過去の判例では、境界は歴史的な支配や管理の状況が基準となると示されています。

市では、この問題を非常に重要視しており、今後地方自治法に基づく調停申請を行うなど、早期解決に向けて必要な取組みを進めていきます。

〔お問い合わせ〕
企画調整課 ☎862・9937

協働さん いらっしゃい！

市民・事業者・行政が支え合う協働のまちづくりに取り組む団体、個人を紹介します。

第４回
「壺屋やちむん通り祭」実行委員

お問い合わせ
市民協働推進課 ☎861-3846

10年先、20年先を見据えて

「壺屋やちむん通り祭2010」実行委員
高江洲啓子（たかえすけいこ）さん

第４回は、前回の粟国智光さんのご紹介で、同じく市の協働大使で、「壺屋やちむん通り祭」実行委員の高江洲啓子さんです。

年々来訪者も増え、にぎわいを見せる「壺屋やちむん通り祭」について伺いました。

Qやちむん通り祭のねらい

祭りをとおして、地域全体の活性化を図ることが大きなねらいですね。

祭りが始まった当初は、祭りによる売り上げに重点が置かれた面がありました。でも、通り会の生活の基盤は、この壺屋のまちですから。この祭りも回を重ねるうちに、地域への感謝の気持ちを込めて、地元の方々も楽しめる祭へ。そして、壺屋のまち全体がもっともっと元気になるような、地域の祭に育てていこうという流れができてきたように感じます。

Q地域の活性化のために

生活の基盤である、この壺屋のまちが活性化して、10年先、20年先に今以上に元気なまちになって、みんなが楽しく生活できるまちになることが、とても大事だと思います。

活性化を図るためには、祭りを地域の手作りで、そして、壺屋のまちで行うことに大きな意義があると思いますね。

壺屋で祭を行うことで、人々が壺屋を訪れ、この場所を知ります。壺屋の歴史や伝統、昔ながらのまちのたたずまいなど、壺屋焼以外の魅力も分かってもらえます。壺屋の魅力をアピールすることで、知名度が上がり、活性化につながると確信しています。

Qこれからの展望は

壺屋のまちに対する熱い思いを持っている方々が大勢います。それらの点をつなぎ、線にして、思いを形にしていきたい。そのためには、若い力が必要です。「壺屋やちむん通り祭」をとおして、次の世代にうまくつなぐ、橋渡しをしていきたい。まちづくりは、結局「ひと」ですから。

壺屋が持っている、たくさんの宝を活かして、壺屋地域全体が、もっともっと元気になるといいなあ。

「壺屋やちむん通り祭」
年々、多くの来訪者でにぎわい、地域の祭りへ成長してきました。

「いい暮らしより　楽しい暮らしを」～人と人とが支えあう協働により、心の豊かさを感じるまちを目指して～